

本邦においては、写真撮影のときアルカイクスマイルといわれる口を閉じ笑みを浮かべるモナリザの様な穏やかな表情が好まれていましたが、最近では歯を見せ、明るく積極的なハリウッドスマイルも多くなってきました。

歯の重要さは、以前より浸透してきましたが、そうは言ってもなかなか歯医者に足が向かないのが本音ではないでしょうか。

歯医者と言えば「痛い」「怖い」。例えば拔牙、昔からおこなわれてきた治療です。ギリシャ時代(B・C800～338)アリストテレスが歯を鉗子

(写真1)で動揺させた後、指で拔牙することに書いて書いています。1)また

近世の拔牙はルーブル美術館に収蔵されているルネサンス時代の画家、ヘリット・ファン・ホントホルストの「拔牙屋」(1622年)(写真2)にも描かれています。拔牙自体は、可能な技術ではありましたが、伴う痛みは途轍もなく大きな物だったことが予想出来ます。

後の1842年Cleark WE (1818～1878 ロチェスター)が拔牙に、そしてLong C (1815～1878, アトランタ)が手術に初めてエーテルを使用しました。2)



写真2 拔牙屋



写真1 オドンターグ

## 医療介護通信

# 歯の治療の痛みと麻酔

医療法人社団仁静堂平山歯科医院  
理事長 平山 明

1949年Morton WG(1819～1868, ボストン, 歯科医師)が、10月16日にエーテル吸入による無痛手術の公開実験を成功させてからは、瞬く間に全米、欧州へ広まって行きました。現代の歯科では、口腔外科手術や障害者の歯科治療等では全身麻酔で行われることもあります。

通常の外來の虫歯治療は局所麻酔(麻酔の注射)を使用して治療を行います。この局所麻酔の登場は、これらのエーテル麻酔よりももう少し後の1884年のKoller C (1835～1922, ウィーン, 眼科医)の cocaインの表面麻酔作用の発見以降になります。3) これ以降、安全性の高い局

所麻酔薬が開発され、現代では治療の多くに使われるようになりました。

また先に記したエーテル麻酔と同時期に試された亜酸化窒素も全身麻酔の補助的薬物として使用される様になりました。歯科においては現在でも笑気吸入鎮静法として局所麻酔と併用して治療への不安や恐怖感を緩和するために使用されます。この他、薬剤を点滴で注射する事により意識が完全になくならない状態で不安を軽減する静脈内鎮静法というものもあります。

痛みを緩和させるためにあらゆる試みがされてきましたが、痛みの少ない治療

器具も多くなってきました。従来の歯を削る機械はエアタービンといって空気圧でタービンを回しその力を利用していた

のが、(これが、あのキーンという音の原因です)最近では高速回転のモーターも多くなってきました。モーターを動力として使用するのでトルクも大きく音も静かです。レーザで虫歯を削ったり、薬で虫歯を溶かしたりする方法も試みられています。とはいえ何もしなくて済むのが一番です。

年に一度程度は、かかりつけの歯科医院で定期健診を受け、歯のクリーニング

### 参考文献

- 1) 別部智司： 絵画を中心とした歯科と麻酔の歴史、日歯史学会誌、2013,4,30(1) 15-23
- 2) 金子謙： 亜酸化窒素アナルゲジアから笑気吸入鎮静法への歴史的変遷、日歯麻誌 2011,39(2)、143-153
- 3) 中久喜喬： 歯科局所麻酔の実際 1979年5月P.2

総合防犯設備・用品



街頭防犯カメラ

株式会社 **オシマ**

<http://www.ohshima-cp.com>

営業センター 千葉市稲毛区宮野木町1664-11

☎ 0120-06-2771

**小林国際特許事務所**

千葉商工会議所会員  
所長 弁理士 小林 正治  
弁理士 小林 正英



TEL 03-3866-3327

東京都千代田区岩本町3-4-5 (秋葉原駅 5分)

<http://www.kipo.jp/>